

桐山へあり



九和

一段

桐山へあり

4
た田之(一)

日暮里ひぐらしといつとわしの目暮里ひぐらしと呼ばれる
 切らぬつとしやつた。世の中はふたつに
 斗心地悪ふつとゆく。
 晴に籠りて来り。一茶ではふたつに時折花の
 都心籠りて来り。それでは以前住んである
 たりは何せんつけと忘れる。くれくれのり、今で
 七階へあればかえれば逆さのうさぎの
 中、桐山、三輪、千住ありと云うる山あり。
 笠森稲荷の裏のことにおつてしまふ。あれが
 くらにし北へ寄るとゆくと左に榎木は昔
 のまゝに残つてある。諏訪社の五垣は
 りかゝつと葛飾の空をわらわれば三輪から千
 住にうけて今ごろは白い葎の花の回圃の
 に若い人たちの心と志をうける
 ねるに葎つとあるれのであつた。いつの
 左側と源三郎の三輪心中は今も
 MARUZEN (1)

九和

全部三頁へ組み

印象

さうと ~~路~~ んささみつけられおのの、今は工
場の煙はさうに詩を思ふべしおい。

誦詠さまうり下りと道灌山へゆく坂のほと

りは一其の道こるべが忘れられぬやうに遺さ

いこぬる。文化何事... 日記抄××町旅所何

左王門とりつ大風お文字かえれと詠ふれり。

左王子道、右三輪... 空想癖の多いわん

くしほいつゆその道こるべの前は立ちとまつ

こは直侍のこと也三ヶ歳のことと思ふ。

一面の雪の埋められぬところの三輪田圃

に ^は 人の荒い男や女たち美しい人情の深と

絞つたことおあうら。

白痴車やトラックがあめをしく走つては

左風お道しるべを ^{の跡} 探してしまふ。

以前の笹の雪を ^{の跡} 探して見えぬあつた

うらまわつししまつた。呉竹橋たの前行の道に

の、今はなんんばうらにあつてしまつた。

根岸に ~~田~~ 住んでゐるところは ~~田~~ 向ひ

六七軒はみんお日本橋や千景あえりの ^{あき} 商人の

おかこい者たち ^お 住んでゐる。なんお人たち

と山朝夕亭を念せこゝろは世間並の接
接しするやうにあり、時こゝろはその人を
の心細い明日を思ふ像することおぼしきや
にあり。子を伴ひて女、子を持つて女、女の
女んちにはもえぬくの不安がつきまといておん。
花柳の下の窓にはよく爪弾きおこし思那を
待つてゐる女おん。

金杉、龍象ちあらはついで地震の前まで
昔のよの池あり、薄く水たまりあり
又、親しい一國手は、池のほ
とりに住んでゐるの、

く静かにゆくと、か水の窓より水鳥の鳴く音
を聴いた山のてあり。笠田の中の水鳥の鳴く音
あつたが、また家の周囲には昔年かお母のこと

水鳥の声、
自然に聴く水、
自然に聴く水、
自然に聴く水、

金杉の國手と思ふ。今の世に珍らしき君子

であつたが、地震が原因に於て久能山の左
 斜に病を養ひ、^ツとあるが、いつか、^宗し
 い暖室の邊に居り、おけは、おけりつた。水鳥
 を探して、おけり、^瑞瑞を飼つて、病日
 正解めつ、^龍龍は、さくおつて、^ししつた。おんお
^舞舞人も、今の世には、おんお、^舞舞に於つ
 てしまつた。

入岩の朝顔のあつ、うよく、^部部おと来た
 新ぬ、^読読りの老婆も、^さされあひ。よつたん
 名人のあつたが、^年年のせい、^頭頭の、^病病におつ

このお。雪の降る夜おと、^根根山平の家を
 部おと、^浦浦甲や、^蘭蘭蝶を、^読読つてくれを。
 このころ、^夜夜お更けると、^世世川あさうへ
^飛飛ん、^ゆゆく鳥の、^声声を、^聴聴く、^何何と、^おお鳥お
 のら、^千千鳥の、^歌歌の、^ゆゆさ、^おおさ、^持持つておる。
 五の鳥おけは、二十年前の、^おおと、^かかほりよひ。

^五五の鳥おけは、^おおと、^かかほりよひ。